

教育プログラム 奈良女子大学

日時：2019年1月11日(金) 10:40～12:10

場所：奈良女子大学

演題：ITと新たなグローバリゼーション: グローバリゼーションの影響がこれほど異なるのはなぜか？

講師：リチャード E.ポールドウィン ジュネーブ高等国際問題開発研究所国際経済学教授

現在のグローバル化は過去のものとは大きく違います。また、将来のグローバル化も現在とは異なるでしょう。本日は、なぜ過去のグローバル化は変わってきたのかを中心にお話します。

グローバル化とは、安い国で買い、高い国で売って利益を上げる裁定取引です。グローバル化により、モノ、ノウハウ、労働が国境を越えていきますが、その際、貿易コスト(モノの移動コスト)、伝達コスト(アイデアの移動コスト)、直接対面コスト(人々の移動コスト)という3つの制約を受けます。

グローバル化以前は、いかなるものも国際間移動においても、全てのコストがかなり高いため、生産と消費が1つの場所で行なわれました。また、生産が地理的に隔離されていたため、伝達コストが高く、それゆえイノベーションが起きず、経済成長率が低いという「大なる停滞」の時代でした。

その後、蒸気機関革命と19世紀の平和により、かつてのグローバル化が始まりました。モノの移動コストが革新的に低下したことで貿易量が増え、生産と消費の分離が可能となったので、各国が得意分野の生産に特化するという比較優位が起き、外国との価格差から利益を上げました。

また、伝達コストを抑えるために、生産が局地的に集積したことで、イノベーションが促され、生産性や所得が向上し、近代経済成長につながりました。一方、ノウハウはG7各国内にとどまったため、他の国々にはイノベーションが普及しませんでした。これが「大なる分岐」です。

ところが、1990年にグローバル化の性質が変わります。ICT革命がアイデアの移動コストを劇的に低下させたので、生産を分離して海外に移転し、賃金格差によって利益を上げられるようになりました。また、円滑な海外生産のために、G7の企業はノウハウも移転させたので、発展途上国でも工業化が進むと同時にノウハウが集積されました。そして、新興国の所得が急成長し、鉄や食料といったコモディティの需要が拡大したことで、その価格が上昇し、コモディティの輸出ブームが起きました。それにより、他の新興国も急成長できました。これが「大なる収斂」です。さらに、将来的にはデジタル化によって直接対面

コストが下がり、労働の裁定取引が行われ、グローバル化に大きな変化をもたらすことでしょう。

新たなグローバル化は、G7の労働力によるG7のノウハウの独占を打ち破りました。そして、製品やセクターレベルではなく、生産ステージレベルで国際競争することになりました。その結果、G7の大半の国において経済不安、経済の脆弱化、人々の経済力の剥奪が起り、反グローバル化の動きが起っています。

また、新たなグローバル化によって、新しい貿易の統治も必要になります。知識と生産の海外移転によって、貧困国が工業化し、グローバルバリューチェーン(GVC)に参加します。こうした、貿易・サービス・資本・知的財産の結合体に対し、新たなパッケージとしての規律が必要です。WTO加盟国でGVCに注力している国はわずかなため、個々で協定が結ばれてきましたが、TPP等が頓挫していることから、WTOが貿易統治において主導権を取り戻す余地ができています。

アメリカでは、トランプ大統領が関税を引き上げようとしています。関税を上げたところでノウハウの海外移転は止まりませんし、国内の材料コストは上昇します。また、海外移転した雇用は低スキルなルーティンワークなので、自国に戻ってきてても結局はロボットが行う仕事です。

では、今後はどのようにすればよいのでしょうか。まず21世紀の現実を受け入れることが必要です。新たなグローバル化は、企業がノウハウを低賃金の新興国に移転したことで起きているので、関税を上げて問題も解決しません。第二に、利益と痛みを分かち合う政策をもってチームを再構築することが必要です。つまり、個々の雇用ではなく、再トレーニングなど、個々の労働者を保護する政策を打ち立てるとともに、自由貿易を進める際には、それにより傷つく人たちも考慮した社会政策を、貿易政策とともにパッケージ化する必要があります。

グローバル化は最も競争力のある市民や企業に対しては常に機会を提供します。しかし、競争力のない市民や企業にとってはマイナスです。ですから、政府が痛みと利益をきちんと分かち合い、より多くの機会と競争力を与えるような政策をつくる必要があります。

